

楽曲解説

今回の解説も筆者の独自目線、余談によって執筆しているものであり、「こういう表現もあるな」という温かい目でご一読いただけるとありがたい。

1. 序曲『フィンガルの洞窟』 作品26 (メンデルスゾーン)

メンデルスゾーン (Felix Mendelssohn=Bartholdy : 1809~1847) は、ドイツのハンブルクで生まれた作曲家、ピアニスト、オルガン奏者、そして指揮者である。幼いころから豊かな才能を発揮し、わずか12歳で「弦楽のための交響曲」を作曲するなど、その38年という短い生涯のなかで、多数の美しいピアノ曲をはじめ、交響曲、管弦楽曲、室内楽、オルガン曲、さらには宗教曲も作曲し、その数は500曲をはるかに上回るものであった。そんなメンデルスゾーンが音楽史に残した業績といえば、グリーグや瀧廉太郎などの優れた作曲家を輩出した「ライプツィヒ音楽院の設立」と、バッハ作曲の『マタイ受難曲』の「蘇演 (1829年、ベルリン)」である。蘇演 (そえん) とは、文字通り、長く埋もれていた作品を演奏することでよみがえらせることである。

その蘇演の後、メンデルスゾーンは、イギリスへ演奏旅行を行った。その際にスコットランドを訪問し、そこで感銘を受けて作曲したのが、交響曲第3番「スコットランド」(作品56)と今回演奏する演奏会用序曲『フィンガルの洞窟』である。

さて、「フィンガルの洞窟」とは、かつて(12世紀ごろ)ノルウェーに支配されていたスコットランドの西岸に位置するヘブリディーズ諸島 (Hebrides) のスタッファ島にある海食洞(波の浸食作用により形成された洞窟で、日本では、伊豆の堂ヶ島などが有名)である。このスタッファ島は自治的にはアーガイル・アンド・ビュート地域に属しており、アーガイルといえば、セーターの柄として、ダイヤモンド模様を規則的に配置したタータンチェック、そう、アーガイル柄が先ず思い浮かぶ。

この曲の特徴は、序奏の無い、ソナタ形式で構成されている。

冒頭から始まる提示部ではまず、第1主題がヴィオラとチェロによって提示される(主調:ロ短調)。これは、長い年月をかけて形成された海食洞の、そのミステリアスな雰囲気を表しており、このモチーフ(動機)が曲全体を支配している。主題がヴァイオリンに転じると、ヴィオラとチェロはトリルのような16分音符の2音間反復トレモロを刻みだす。これは洞窟に波が打ち寄せる様子を表現している。この音形が、楽器を変え、さらに強奏(フォルテ)と弱奏(ピアノ)を繰り返し、まさにこれは大きい波や小さい波が表情を変えながら次々と打ち寄せる様子であろう。

第2主題は、チェロとファゴットによって提示される(平行調:ニ長調)。洞窟の中に存在する岩石柱の荘厳なイメージを表現している。続く小結尾(コデッタ)では第1主題のモチーフを題材として盛り上がり、ホルンとトランペットがファンファーレを奏でると、曲は展開部へと進む。

展開部では、基本的に第1主題を中心に進められ、提示部の小結尾のファンファーレに

続いて弦楽器が上昇音階を強奏したのち、曲は再現部となる。

再現部は非常に短く、クラリネットが第2主題（同主調：ロ長調）を奏でると、曲は終結部（コーダ）となり、海食洞を形成してゆく嵐や波のうねりを表現したのちに、静まるように曲を閉じる。

なお、そんな荒れ狂う波の様子は、イギリスの画家ターナーの同名の絵画によっても見ることができる。

2. ピアノ協奏曲 イ短調 作品16 (グリーグ)

グリーグ (Edvard Grieg : 1843~1907) は、ノルウェーのベルゲンで生まれた作曲家、ピアニストである。弱冠15歳からドイツのライプツィヒで音楽を学び、やはり優れたピアニストだったシューマンの影響を受けたが、後年は、ノルウェーの民族的な傾向を強めた作品を送り出している。日本ではこの協奏曲のほかに、「朝」や「山の魔王の宮殿にて」でおなじみの『ペール・ギュント』が有名であるため、グリーグが管弦楽の作曲家というイメージが強いが、『叙情小曲集』などのピアノ曲にこそ、その素朴さと美しさがある。なお、余談であるが、その『叙情小曲集』のうち、北欧の雄大な自然に想いを寄せた「春に寄す」は、リズムやメロディーの譜割りがシベリウスの交響曲第2番の第1楽章を彷彿させることは興味深い。

第1楽章 Allegro molto Moderato イ短調 4分の4拍子

序奏は、ティンパニーのロールに引き続いて、ピアノが階段を転がり落ちるようなフレーズを奏でる。この序奏主題は、オルフ作曲の『カルミナ・ブラーナ』の冒頭や、バッハ作曲の『トッカータとフーガ ニ短調』の冒頭とともに、想定外の出来事に驚愕したときに、テレビ番組の中だけでなく、実際にわれわれの頭の中で流れる音楽である。また、ウルトラセブンの最終回でモロボシ・ダンがアンヌ隊員に自分の素性を告白するときに流れる BGM は、この協奏曲に影響を与えたとされるシューマンの同じくイ短調のピアノ協奏曲の冒頭である。

この楽章はソナタ形式となっており、提示部ではまず、木管楽器が第1主題（主調：イ短調）を奏でる。ピアノが主題の確保を行い、小鳥が遊んでいるような経過句を経て、チェロがハ長調（平行調）の第2主題を奏でる。その後、強奏で始まる小結尾をトランペットのファンファーレで締めくくり、展開部へと移行する。

展開部では、第1主題のモチーフを半音ずつ上昇させて繰り返す（ゼクエンツ）などして気分を高揚させたのち、落ち着きを取り戻してから再現部に移行する。

再現部はソナタ形式の王道らしく、第1主題をイ短調（主調）で、第2主題をイ長調（同主調）で、それぞれ再現している。

ピアノによる第1主題のモチーフを基本としたカデンツァの後、曲は終結部（コーダ）となり、ピアノが序奏主題を再現して第1楽章を終える。

第2楽章 Adagio 変二長調 8分の3拍子

弱音器（ミュート）を付けた弦楽器がそよ風を表現しているような主題で始まる第2楽章は、「主部」－「中間部」－「再現部」の複合3部形式である。

主部主題と、それに応えるような副旋律（主旋律の動機の反進行をモチーフにしている）、実に牧歌的な情景が表現されている。ホルンの角笛のような旋律が遠くから聞こえてくると「中間部」となり、ピアノが登場する。ここは、木々のざわめきや湖面にきらめく陽光を表現しているのだろうか。フルートとクラリネットが主部主題のモチーフを断片的に表現する経過部を経て、再現部となる。ここではピアノが主部主題を堂々と演奏する。再びホルンの角笛が聞こえてくると、ピアノが静かにアルペジオを奏で、切れ目なく第3楽章に移行する。

第3楽章 Allegro Moderato e marcato イ短調 4分の2拍子

行進曲風な導入にピアノがカデンツァで応える。このパターンは、内向的でありながらも雄々しく甘美な旋律で有名なラフマニノフのピアノ協奏曲第2番の第3楽章の冒頭と共通した構成を感じる。

この楽章は、ロンド・ソナタ形式に分類される。提示部の第1主題は舞曲的、対する第2主題はピアノの順次進行のメロディーで始まる。その後、第1主題が変化を付けながら繰り返される。

展開部（中間部）では、新たな主題がフルートによって清々しく提示され、それにピアノがやさしく復唱する。

再現部のあと、ピアノのカデンツァを経て、少し長めな終結部（コーダ）に入る。

終結部の前半は、第1主題を3拍子（ワルツ風）にアレンジしており、トランペットのファンファーレに続く後半は、展開部の主題を力強く表現して、感動的に全曲を締めくくる。

3. 交響曲第2番 二長調 作品43（シベリウス）

シベリウス（Jean Sibelius : 1865～1957）は、当時ロシアの支配下となっていたフィンランドのヘルシンキ近郊のヘメーンリンナという都市で生まれた。20歳の時にヘルシンキ音楽院でヴァイオリンと作曲を学び、その後、ベルリンやウィーンに留学し、主に作曲を学んだ。帰国してからは、音楽院の教師となり作曲の教鞭をとる中、1892年には、フィンランドの民族物語「カレワラ」を題材とした『クレルヴォ交響曲』、翌年には、北欧神話をイメージした交響詩『エン・サガ（伝説）』を発表し、フィンランドでの作曲家としての地位を確固たるものとした。その後、ヨーロッパ各地で自作を発表するなどして国際的な名声を高めていった。そんな1902年に発表したのが交響曲第2番である。

第1楽章 Allegretto イ長調 4分の6拍子

序奏は 8 小節しかない短いものだが、弦楽器が湧き出るように奏でる序奏主題は、この曲の重要な役割を果たす。そこに、オーボエとクラリネットが第 1 主題を重ね、提示部を開始する。フルートも加わり主題を確保したのち、ヴァイオリンが副旋律を示す。弦楽器のピッツィカートを経過句を経て、木管楽器による第 2 主題が現れるが、21 小節という短いもので、続いて示される小結尾（コデッタ）では、弦楽器の序奏主題に木管楽器が応答するという構成となり、その後、弦楽器が序奏主題を繰り返しながら勢いを弱めて、曲は展開部へ移行する。

展開部は 2 部構成となっている。前半は、提示部の小結尾における木管楽器の応答主題を中心に展開され、後半では、コントラバスが新しいモチーフを提示する。各楽器で展開しながら勢いを増し、第 2 主題を勇壮に示したのち、金管楽器が第 1 主題の副旋律を強奏すると曲は一旦停止（フェルマータ）する。そして曲は、再現部となる。

提示部と同様に、弦楽器が序奏主題を繰り返しながら勢いを弱めていくと、そのまま、第 1 楽章を終える（この楽章のソナタ形式には終結部がない）。

第2楽章 Tempo andante, ma rubato 二短調 4分の4拍子

この楽章は、北欧のもう一つの面、冬の厳しさを表現している。ティンパニーのロールにコントラバス、続いてチェロが重い足取りを表現する（序奏）。チェロのピッツィカートがオスティナート（同じ音形を繰り返すこと）のように変化すると、ファゴットが、寒さに耐えているような第 1 主題を奏でる。それにホルンが付点のリズムで呼びかける。これは、第 1 主題の結尾の金管楽器のコラールを暗示している。

第 2 主題は弦楽器によって美しく現れる。これは、厳しさの中にも見ることができ冬らしい美しい光景を表しているようだ。結尾では一転して、低音楽器が冬の荒々しい気候を表現する。

曲は再び第 1 主題と第 2 主題を繰り返す。したがってこの楽章の構成は、「序奏」－「第 1 部（第 1 主題部&第 2 主題部）」－「第 2 部（第 1 主題部&第 2 主題部）」－「終結部」の複合 2 部形式となっている。

第3楽章 Vivacissimo 変口長調 8分の6拍子

この楽章も第 2 楽章と同様、複合 2 部形式である。序奏はないが、激しい第 1 主題部と、オーボエが奏でるのどかな旋律の第 2 主題部との対比は、「嵐」と「牧歌的風景」の対比のように思える。この対比構成は、ベートーヴェンの「田園」交響曲の第 4 楽章と第 5 楽章（終結部を除く。）との関係を連想させる。

この対比が繰り返されたのち、曲は終結部となる。春が近づいてくる気持ちの高揚を表現しており、切れ目なく第 4 楽章に移行する。

第4楽章 Allegro moderato 二長調 2分の3拍子

第2楽章の「厳冬」、第3楽章の「気候の変化」を経て訪れた春への喜びを弦楽器の力強いモチーフで表現している（第1主題）。そこにトランペットとオーボエが明るい日差しを表現して応答する。この楽章は、先述した『田園交響曲』に例えるならば、その第5楽章の終結部に相当するものであろう。

第2主題は、ヴィオラとチェロの不安げなオスティナートを従えて木管楽器が繰り返し奏でる。チェロのオスティナートに木管のメロディーという構成は、「厳冬」を表現した第2楽章の第1主題と同じである。即ち、この部分は「寒の戻り」と言ったところであろう。オスティナートの動きが荒々しくなると、金管楽器によるファンファーレ（副主題）によって第2主題部の頂点に達する。低弦のピッツィカートに誘導されて落ち着きを取り戻した小結尾（コデッタ）では、管楽器の奏でる第1主題のモチーフに、弦楽器が第2主題のモチーフで応答する。

展開部は、まずチェロが低音で第1主題のモチーフを、変化をつけながら表現する。その後、ファゴットが第2主題部の副主題を奏で、これら2つのモチーフを中心に展開が行われる。

再現部では、第1主題の再現ののちに第2主題の再現となるが、ここでは、再現するだけでなく、盛大に展開を行っており、そのまま終結部（コーダ）に移行する。

そして、雄大で美しい自然への賛美を高らかに歌い上げて全曲を締めくくる。

ライプツィヒをはじめとする中部ヨーロッパの各都市に旅行する際、ひと昔前までは、当然のようにフランクフルトを経由していたが、近年は、ヘルシンキを経由する渡航者が多くなっている。次の機会には、「経由」するだけでなく、実際に北欧の自然に触れてみたい、そんな気持ちを起こさせる曲である。

以 上